

# 平和のバトンを若い世代に…

河合靖久

「ピースおおさか

大阪国際平和センター」を訪ねて

高齢で施設に入った姉の見舞いを兼ねて、昨年冬に大阪に出かけ、「ピースおおさか大阪国際平和センター」を偶然知り訪問しました。地下鉄の降り口を間違えたらしく、大阪城周辺をかなり歩いてたどり着きました。が、大阪城公園の一隅・地下鉄森ノ宮駅から400mは良い環境です。施設は、1991年9月の開館だそうですが、2015年4月のリニューアルオープンだそうです。

入館料は、大人250円、高校生150円65歳以上・障がい者・小中学生は無料。平常の開館日に、定時映

画上映。戦争体験の語り部の紹介。平和紙芝居の開催や、ウィークエンドシネマ、戦争や平和の映像資料の鑑賞。戦跡ウオークなどを毎月実施しています。

施設は、鉄筋三階建て、展示スペースは回廊式、講堂（映写室）図書室、映像コーナー、休憩所、コインロッカー、エレベーター、自動販売機も設置されて、全体を時間をかけてゆつくりと見学が出来ました。職員にさそわれ、講堂一人占めの劇映画の鑑賞…も…。

「戦後70年を迎え、戦後生まれが総人口の4分の3を超えた今日、戦争の記憶を風化させることなく、次の世代に戦争の悲惨さと、平和の大切さを伝えていくというピースおおさかの役割はますます重要になっていきます。」（ピースおおさか からのメッセージ15年4月

30日より、いくつかの新鮮な取り組みに触れることが出来ました。

工夫されていると思われるのは、被災体験者の語る姿が常時映し出されるなど映像の展示が各所にありました。もちろん市街地の空襲の惨状も、表や図でも示され、ジオラマ・室内の装飾と動画映像も印象に残りました。

二月末でしたが、引率された小・中学校生の団体が数か校見学していて、午前中は賑わっていました。

日本平和博物館会議、埼玉県平和資料館「埼玉。ピースミュージアム」、神奈川県立地球市民かながわプラザ「あーすぷらざ」、川崎市平和館、立命館大学国際平和ミュージアムなどの関連施設の紹介展示も有り、沖縄のひめゆり平和資料館や、広島平和記念資料館の資料や案内のピラも置かれ、発展的な平和を学ぶ環境を感じました。

特別展『学童疎開と子どもたち』は、家族との手紙や写真などの展示で、当時の子どもたちにも、苦悩ばかりでなく笑顔もあったことを知りました。長岡市の学童疎開受入校と宿舎を中心に調べていた私には、送り出した親達の提供した日記や手紙、ハガキなどの生

の資料に感動しました。長岡にも先生方と一緒に集合写真や相撲大会などの写真、その背後の木に登り覗き込んでいる地元のヤンチャ坊主の姿も有り、市史には、食糧難の中でも正月休みに、親元を離れてかわいそうにと農家の家庭に分宿した記載などもありました。複眼的調査が望まれます。

次世代に語り継ぐ試みとして注目したのは、自分が体験していないことを語り継ぐヒト・モノ・キオクを伝える「語り継ぎ部」育成のための講演会が事業として計画されていたことです。直接体験のない世代が語り継ぐことで「伝える」ことを積極的に模索している事業だと思いました。戦後70年も経過し、直接戦争体験を聞く機会は少なくなつて、次の世代へ戦争を語り継ぐ『語り継ぎ部』世代を大切な存在と位置づけています。二人の講師の年代は、案内ピラのみでは分かりませんが、第二部では「語り継ぐ」をテーマのシンポジウムが予定されていました。

### 長岡の学童疎開を調べて

虚偽の大戦果を大本営発表で誇っていた政府・軍部は、空襲がピンポイントの軍需工場爆撃から大都市無

差別爆撃へと広がる中で、急速、学童の集団疎開が立案されたそうです。当初の縁故疎開（親戚・縁者・知人に頼る）の原則から、「子どもが居ては邪魔になる」との方針に変えたわけです。ミッドウェー海戦以降の日本は制空権を失い、B29爆撃機による空襲が日常的に可能となったからと言われています。

大阪では、集団疎開に行った子どもや付き添いの先生方の証言、手紙や写真に70年前の真実に触れた思いでした。

大合併後の長岡市の学童疎開の資料をまとめると、東京方面から1943（昭和18）年夏から終戦までの二年間で、国民学校初等科（今の小学校）3〜6年生の総勢2000余名を学童集団疎開として受け入れました。（「太平洋戦争と長岡空襲 長岡戦災資料館」の一覧表を元に旧川口町分を追加して計算）

当時大都会（沖繩を含む）で縁故先のない児童は35万人もいたそうです。長岡市内でも（別情報）一部の子どもに、親戚などを頼った疎開が始まっていたそうです。学童集団疎開を大合併以前の市町村別に見ると、長岡市は、約455名を9カ校で引き受け、学寮（宿舎）は、14カ所。長岡空襲直前の7月に郊外の2

校に再疎開した。学寮は5カ所追加。

栃尾市は、238名を3カ校に分け、学寮5箇所だった。

与板町は、296名を2カ校に分け、学寮9カ所に43〜23名に分散し学校に通った。寺泊町は、241名を2カ校に分け、学寮6カ所に分宿。

越路町は、185名を2カ校に分け、学寮5カ所。

川口町は、99名を3カ校に分け、学寮3カ所。

中之島町は、79名が1カ校に、学寮2カ所でした。

この中の学寮とは、寺院が多く、他に旅館・料亭なども疎開児童の宿舎でした。

作成中の表を数カ所で紹介したところ、新たな情報が寄せられ戦後72年の歳月も少しは埋めることが出来るかとも考えました。

長岡市では、再疎開の結果、疎開児童が空襲に遇わなかったと思えば、学校の沿革史に「空襲で亡くなった疎開児童」の記述を見たとの情報がありました。長岡市史には空襲の後、一部の子どもが見つからず、教職員が必死に探し回り無事だったとの記述があったのです。（再度追跡調査の要有り）この学校には、戦後疎開児童の家族から贈られた花瓶も有るそう

です。

栃尾市には、卒業式のために東京に帰り、「卒業帰宅児」が東京大空襲で亡くなったとの受入校沿革史に記載があった、との助言も貰いました。

疎開校のHPを調べて疎開の記録が見つかることは少ないですが、栃尾が第1次疎開で「曾根町に20年8月第2次疎開」とか「柏崎に疎開」とか混乱した記述も見つかりました。この曖昧さも生活・生存そのものを奪う「戦争」の実相と言えます。

与板小学校のグラウンドには、疎開50年記念に柿の木を植え「収穫した柿を東京の疎開校に送り交流」との記録あり、石碑も存在します。

一覽表に載っていないお寺も宿舍に使われたとの情報もあり、さらに事実を追い続ける必要が有りそうです。川口の小学校には、娘さんが世話になったと有名な画家の絵が校長室に掛けられていました。疎開校、受入校、宿舍となった学寮、その一つ一つ、一人一人に、幼い頃の貴重な歴史があったことを考えてしまいます。

1944年（昭和19年）8月22日、沖繩からの学童疎開輸送中にアメリカの潜水艦に沈没させられた対馬丸など数え切れない学童疎開の悲劇は有ります。在っ

てはならなかった戦中・戦後の暮らし、思い出さなくてもない記憶の中に一片の笑顔をも語り継ぐ大切さを感じます。未だに定まらぬ記憶と記録…。それらのひとつ一つの真実を拾い集め紡ぎ直していくことも、若い世代へつなぐ平和のバトンとならないでしょうか。

### 長岡戦災資料館の感想帳から

取材で感想帳を拝読しました。以前から見ると小中学生には、蛍光ペンなどを使い大きな文字で、カラフルで直接的な「戦争反対」「戦争はやめて」「平和が一番」「平和は大事！」などが以前より目立ちました。私の一方的な感想ですが、以前のようにじつくりと感想文を書き込む時間が少なくなってきたのかなとも思いました。

近隣の市町村の小中学生は、やや時間があったのか（これも活動の一形態か）班の複数人で数行記入していました。「ビデオとか見て戦争するのは絶対だめだと思いました。平和ってイイネ」「戦争は多くの人を苦しめるから絶対だめだと思っ」などです。

近隣の市町村からも中高生が来館し、興味深い記載をしています。（後日分析を…）

長岡市の戦災資料館も次の世代に伝えるべき様々な取り組みを試みています。館の案内資料に、長岡空襲史跡めぐりのモデルコースと解説の掲載もその一つといえます。

中学生を対象とした長岡空襲解説講座／長岡空襲の真実を知ろうの取り組みは、直接中学生向けの講座で、各中学校による独自の取り組みと結んで丁寧に取り組み、大切に育てたいものです。大きな成果と発展が期待されます。

(かわい やすひさ・長岡市)

## 「学童集団疎開」について

「疎開（そかい）」とは、軍事用語で「分散して闘いをすすめる」という意味で、空襲を避ける生産（工場）疎開、建物壊しの建物疎開。人が対象の人口疎開があり、子どもの場合、将来の戦力を温存する軍事配置の意味もあった。

疎开学童数は、文献や時期により異なる。終戦直前の春には、1〜2年生の第二次疎開も一部にあった。（『語り継ぐ学童疎開』のHPを参考にした。）

1944（昭和19）年9月現在の疎开学童数は東京都23万5千人、神奈川県3万8千人、愛知県3万4千人、大阪府6万6千人、兵庫県2万2千人、沖縄県の5万6000人で総計40万6000人だが、さらに、京都府1万4千5百人、広島市9千人、函館市千4百人位などもあった。新潟県は、世田谷・葛飾・江東区から1万2千〜1万4千人を受け入れた。栃尾市から、中等学校入試に臨むために東京戻った「卒業帰宅児」が、三月一〇日の東京大空襲にあった。

(河合)